

ジョホールバルの遊神と無形文化遺産への道

横田 浩一

私は2025年2月13日から19日（旧暦1月16日～1月22日）までマレーシアのジョホールバル¹に滞在し、遊神儀礼を観察する機会を得た。遊神（写真1）とは、神像を神輿や車に乗せて一定のルートを通り歩く儀礼である。通常、華南からの移住者が多数を占める東南アジア華人²社会では、旧暦1月15日およびその前後で儀礼を行うことが多い。今回のジョホールバル訪問は、この儀礼を観察することが主な目的であった。



写真1 遊神の隊列（2025年2月17日、筆者撮影）

¹ ジョホールバルは、マレー半島南端に位置する都市であり、ジョホール州の州都である。南部はシンガポールと接しており、国境を行き来してシンガポールへ通勤する人も多い。

² 華人とは、一般に居住国の国籍を保持する中国出自の者を指す。近年の華僑華人研究では、居住国の国籍を保持しない中国籍者＝華僑と、居住国の国籍を保持する華人とをことさらに区別せずに表記する傾向にあり、本稿でも居住地や国籍を問わず、中国に出自を持つと認識する人、される人を華人と呼ぶこととする。

ジョホールバルの遊神は毎年旧暦 1 月 18 日から 22 日までの 5 日間行われる。1 日目は「亮灯 (火をともし)」(写真 2)、2 日目は「洗街 (御輿が練り歩くルートをきれいにする)」(写真 3)、3 日目は「出鑾 (御輿の出発)」(写真 4)、4 日目は「夜遊 (夜の遊行)」(写真 5)、5 日目は「回鑾 (御輿の帰還)」である。遊神儀礼の中心舞台は、ジョホールバル旧市街にある柔佛古廟および、そこから 3 キロメートル離れた郊外にある「行宮」という神像が集められる広場の 2 箇所である。儀礼の大まかな過程は以下の通りである。1 日目の「亮灯」は行宮で実施され、2 日目は柔佛古廟から行宮を経由して市内を一周する。3 日目にはすべての神像を柔佛古廟から行宮まで移動させ、4 日目は行宮を起点に市内を一周する。5 日目にすべての神像を柔佛古廟に戻して儀礼は終了する (表 1)。



写真 2 亮灯。中央の玉にかざすと明かりが点灯する (2025 年 2 月 15 日、筆者撮影)



写真 3 洗街。水と米を撒き、遊神のルートを清める (2025 年 2 月 16 日、筆者撮影)



写真 4 洪仙大帝(福建人の神)の隊列 (2025 年 2 月 17 日、筆者撮影)



表 1 ジョホールバル遊神のルート(2 日目がピンク、3 日目が黒の点線、4 日目が青、5 日目が黄色で示されている) (『柔佛人』2024 年 2 月 26 日より)



写真 5 夜遊の隊列と見物する観衆 (2025 年 2 月 18 日、筆者撮影)

ジョホールバルの華人社会および遊神の特徴は、昨年私が観察したジョージタウンの遊神〔横田 2024〕と比較すると以下の点にあると思われる。①マレーシア華人は福建人が多数派であるが、ジョホールバルの多数派華人は潮州人である。②5つの華人方言集団（福建、広東、潮州、客家、海南）が共同で遊神を実施する。③遊神儀礼は5日間にわたって実施され、1日目には前夜祭として「亮灯」に関わるイベントが行われる。また、遊神4日目の「夜遊」では街の中心部にステージが設置され、プロのMCが会場を盛り上げる。伝統的な儀礼というだけではなく、観光イベントとしての側面もあるといえる。

まず①について、マレーシアでは福建人が華人方言集団の中で最も人口が多いとされている。それに続いて客家、広府人、潮州人の順に人口が多いとされ、潮州人は華人の中では11.3%の割合を占める〔黄・楊 2023 : 159〕。つまり、マレーシア華人の中では潮州人は少数派である。しかし、ジョホールバルでは19世紀にこの地の開発を担った華人の9割が潮州人だったとされており〔黄・楊 2023 : 162〕、ジョホールバル華人社会初期の中心となったのは潮州人であった。そのため、儀礼の過程において形式上、最も重んじられているのは潮州人の神である元天上帝（写真6）である。



写真6 先天上帝(真ん中) (2025年2月14日、筆者撮影)

②について、ジョージタウンの遊神で、12年に一度の特別な儀礼以外、基本的には福建人を中心としたものである。一方でジョホールバルでは、毎年遊神においても5つの方言集団およびその会館が協力関係にあり、遊神の隊列では海南、客家、広東、福建、潮州の神像を順番に担いで練り歩くことになっている（隊列の後方ほど重要とされる）。ジョージタウンとは異なり、ジョホールバルでは1870年頃に柔佛古廟（写真7）が設立された際に5つの方言集団の信仰する神像が並んで安置され、1922年には5つの方言集団の協議によって上記のように一方言集団につき一体の神像を信仰対象とするという体制が形作られた〔莊 2016：257〕。もともとジョホールバルでは、開発の初期に秘密結社同士の争いが激化して争いが生じることをテメンゲン³・イブラヒムが懸念し、1840年代以降、義興会のみが合法的な秘密結社としての存在を許されたという背景がある〔莊 2021：6-7〕。そのため、いくつかの秘密結社が入り乱れたジョージタウンとは異なり、華人方言集団間の争いが顕著ではなかったことが5つの方言集団共同での遊神の実施と密接に関わっている。



写真7 柔佛古廟外観（2025年2月14日、筆者撮影）

³ テメンゲン（Temenggong）は、ジョホール王国の警察、治安維持担当の称号を保持し、領土管理権をスルタンから与えられている地方領主である。

③について、現在のジョホールバルの遊神はイベントとしての色彩が強い。もともと遊神は4日間の開催であり、1日目の「亮灯」は2000年に始まった。また、4日目の「夜遊」でも市内中心部のショッピングモールが並ぶメインストリートに舞台を設置してプロの司会者を呼び、大型のオーロラビジョンを設置してイベントを盛り上げる。このステージは「恭迎台」と呼ばれ、2004年から設置された[舒・陳(編) 2010: 44]。舞台を設置することで貴賓を招き、遊神やそれに付随する大きな旗を振る出し物や、龍舞、獅子舞を鑑賞してもらうことを目的としている。当日はジョホール州スルタンの王子も招かれて来臨した。

これらに加えて、1日目と4日目には、「携手世遺，共創輝煌（ともに手を取り世界遺産へ、ともに創ろう輝かしい成果）」あるいは「Road to UNESCO」（写真8）というスローガンが司会者から何度も発せられ、観衆もそれに応答してコールアンドレスポンスを要求する場面が何度もあった。ジョホールバルの遊神では「興啊（*heng a*）」、「発啊（*huag a*）」（潮州語）というお決まりの掛け声で祭りのボルテージが上がる⁴。それは司会者がいようがいまいが自然発生的に観衆から発せられるものである。また、司会者が呼びかけた際にも観衆は「興啊」、「発啊」という掛け声に必ず応じる。一方で「携手世遺，共創輝煌」あるいは「Road to UNESCO」というMCの掛け声に対しての反応は芳しくない。

⁴ 「興啊（*heng a*）」は、「盛んになれ」という意味であり、事業などが発展することを、「発啊（*huag a*）」は「豊かになれ」という意味で、金持ちになることを願う掛け声である。発展や豊かさへの祈願が祭りの掛け声に込められている。



写真 8 デフォルメされた神の下に 2025 年のスローガンが見える

(2025 年 2 月 14 日、筆者撮影)

現在、マレーシアのジョージタウン、ジョホールバル、シンガポールは共同で *Chingay* をユネスコの無形文化遺産に申請している。*Chingay* (妝藝：福建語) とは、マレーシアやシンガポールで旧正月に華人が行うパレードを指しており、通常は神の生誕祭を祝う儀礼を伴う。ジョホールバルの遊神はまさに *Chingay* でもある。2025 年 3 月にはユネスコに無形文化遺産としての申請を行い、2025 年末には結果が判明する。そのため、今年(2025 年)のジョホールバルの遊神ではその気運を盛り上げるために行宮でもユネスコへの申請に際して何をアピールしたのか、遊神にどういった価値があるのかをパネルで展示していた(写真 9)。ユネスコの無形文化遺産として認定されることで、自分たちの文化が価値あるものであると認められるだけでなく、経済的な利益をもたらすことも期待されている⁵。一方で、華人団体の関係者や一部の利害関係者以外には、「Road to UNESCO」という

⁵ ジョホール州は 2026 年を「ジョホール観光年」に指定し、文化を経済の推進力とすることを期待している。さらに、飲食、宿泊、交通などの関係する産業にもその恩恵が得られることを目指している。e 南洋「柔佛古庙游神深層意義/南洋社論」2025 年 2 月 20 日

<https://www.enanyang.my/%E8%A8%80%E8%AE%BA/%E6%9F%94%E4%BD%9B%E5%8F%A4%E5%BA%99%E6%B8%B8%E7%A5%9E%E6%B7%B1%E5%B1%82%E6%84%8F%E4%B9%89%E5%8D>

スローガンはあまり響いていないような印象を受けた。今年のユネスコの申請が首尾良くいくのか、また遊神に直接参加した者、観衆として見物した者も含めて無形文化遺産としての認定がどのような効果をもたらし、遊神を変えていくのか／あるいは変わらないのか、引き続き注目していきたい。



写真 9 行宮に設置されたパネル。ユネスコ無形文化遺産申請の過程が説明されている

(2025 年 2 月 15 日、筆者撮影)

参考文献

横田浩一 2024「マレーシア・ジョージタウンにおける華人の伝統／文化イベントとしての儀礼 ——「宝福社甲辰年請火大伯公香花車大遊行」を事例として」『海域アジア・オセアニア NEWSLETTER』2：1-33。

黄曉堅・楊錫銘 2023『東南亜潮州人研究』北京：中国社会科学出版社。

舒慶祥・陳声洲（編）2010『柔佛古廟百年遊神照片匯編』新山：新山中華公会轄下柔佛古廟管委會。

莊 仁傑 2016「柔佛古廟遊神中的新山客家公会与感天大帝」『全球客家研究』6：253-278

———— 2021 「甲必丹制度的現代変奏——以柔佛古廟遊神為個案」『民俗曲芸』212：1-42。

新聞

e 南洋「柔佛古廟游神深層意義/南洋社論」2025 年 2 月 20 日。

Web サイト

柔佛人「柔佛古廟游神 新山市数要道封路」

<https://johor.chinapress.com.my/20240226/%E6%9F%94%E4%BD%9B%E5%8F%A4%E5%BA%99%E6%B8%B8%E7%A5%9E-%E6%96%B0%E5%B1%B1%E5%B8%82%E6%95%B0%E8%A6%81%E9%81%93%E5%B0%81%E8%B7%AF/> 2025 年 3 月 18 日閲覧。

(よこた・こういち 人間文化研究機構／東京都立大学)